

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 81 号

2019 年 3 月

日本薬史学会2019年度の主要行事のご案内

編集委員長 小清水敏昌

来年度の日本薬史学会の日程について1月27日の常任理事会において、以下の通り決定されました。多数の会員のご参加をお待ち申し上げます。

1. 日本薬史学会総会・公開講演会の開催日について

開催日：2019年4月20日（土） 会 場：東京大学大学院薬学系総合研究棟

1) 12:30～13:30 理事・評議員会（10階大会議室）

2) 14:00～15:20 総会（2階講堂）

3) 15:30～17:40 公開講演会（同上）

○大場秀章先生（東京大学名誉教授）

「植物研究雑誌の創刊と発展を支えた人々」（仮題）

○坂本一民先生（東京理科大学理工学部客員教授）

「化粧品の科学技術の発展における日本の貢献」（仮題）

懇親会会場：山上会館地下食堂（予定）

2. 柴田フォーラムの開催日について

日 時：2019年8月3日（土） 14:00～

会 場：東京大学

3. 日本薬史学会2019年会の開催日について

日 時：2019年10月26日（土） 10:00～

年会長：森田 宏 理事（内藤記念くすり博物館長）

会 場：内藤記念くすり博物館（岐阜県各務原市川島竹早町1）

日本薬史学会2019年会のお知らせ

開催日：2019年10月26日（土）

(URL: [http://www.eisai.co.jp/museum/](http://www.eisai.co.jp/museum/information/index.html)

会 場：内藤記念くすり博物館

[information/index.html](http://www.eisai.co.jp/museum/information/index.html))

(〒501-6195 岐阜県各務原市川島竹早町1) 年会長：森田 宏（内藤記念くすり博物館 館長）

交通：当日は尾張一宮駅よりバスを手配する予定

【参加費】：

- ・ 会 員：事前登録4000円、当日登録5000円
(学生会員 無料)
 - ・ 非会員：当日登録6000円(学生非会員1000円)
 - ・ 情報交換会：5000円(学生1000円)
- 内藤記念博物館内

【学術研究発表】口演及びポスター

【特別講演】【特別講演・公開市民講座】予定



歴史ツアー：10月27日(日)

内藤記念くすり博物館探訪ツアー&故下山順一郎
碑・薬師如来巡り(予定)

日本薬史学会2018年会(新潟)報告

編集委員 久保鈴子

日本薬史学会2018年会は56名の参加の下、10月27日(土)午前10時から新潟日報メディアシップ日報ホールで開催された。年会長の新潟薬科大学学長寺田弘先生より、調査と発表された内容についての現代的意義を明らかにするためにも活発な議論が行われることを願う旨の挨拶があった。

年会では、12題の口頭発表、4題のポスター発表、2題の特別講演が行われた。一般発表では、医薬品の史的考察に関するものが3題。このうち興味深かったのは、小清水先生の「明治初期に市販された「喘息煙草」を巡る史的考察」で、明治14年に発売されたという印度大麻を煙草状に製して吸う喘息薬に関する発表であった。当時の国内の医薬品をめぐ

る規制や販売広告に関する周辺環境についても詳細に調査された内容であった。また、外国の薬剤師の活躍に関して3題。このうち西川先生による「オランダの薬剤師 H. ビュルガーのわが国薬学史上の意義に関する一考察」では、H. ビュルガーはシーボルトの助手として来日した我が国初めての薬剤師であり医薬面のみならず自然科学面の調査・研究でも力を発揮した。特に温泉水の化学的分析は我が国薬学における温泉研究導入の礎となったとの発表があった。その他、五位野先生による「新潟県の明治時代の薬学史」、石田先生による世界の6施設を見学して発表された「レプラ・ハウス(Leproserie)の歴史」、医薬品の承認に関する演題など、ポスター発表も含



めて興味の尽きない多彩な発表が行われた。

特別講演①は、小林力先生（日本薬科大学教授）による「サルファ剤：忘れられた奇跡とその影響」であった。製薬会社の創薬への取組、国による医薬品規制、医師と患者の関係の変化は、サルファ剤の開発と流通が契機となり現在に至っていることを学んだ。

特別講演②は、精神科医師であり良寛研究者でもある櫻井浩治先生（新潟大学名誉教授）による「良寛さんに学ぶ 一心身医学の立場から」であった。良寛が寒冷地での過酷な日常の中でも心身両面から健康と病に対して積極的な留意と対応を心がけていたことを知った。

学術時間終了後は、46名の参加を得て情報交換

会に移った。夏目先生の御主人によるフルート演奏を聴きながら新潟ならではの日本酒を片手に親交を深めた。

翌日28日は番外編「良寛の里ツアー」であった。特別講演の櫻井先生が同行してくださり、良寛記念館や良寛が20年過ごしたという国上寺・五合庵を訪ねた。櫻井先生の良寛への想いを込めた解説を聴きながら参加者29名はバスツアーを楽しんだ。

学会企画・運営に尽力された寺田弘先生はじめ新潟薬科大学年会実行委員会の皆様に深謝致します。2019年年会は、10月26日（土）にエーザイの内藤記念くすり博物館（年会長：森田宏館長）で開催されます。次回は岐阜県でお会いしましょう！

六史学会報告

編集委員 齋藤充生

平成30年12月15日に順天堂大学にて六史学会が敢行された。演題はHPにて公開されているので、本稿では演題名等は省略し概略と参加しての感想を述べたい。

日本薬史学会からはケシ標本からの報告があった。非破壊検査の「芥子粒」の形状からの系統の考察は興味深かった。ケシは歴史的資料であっても、麻薬及び向精神薬取締法の対象となり、麻薬研究者でなければ取り扱えないとのことであり、歴史資料の研究で留意が必要と考えられた。

日本獣医史学会からは鹿のプリオン病である慢性消耗病（CWD）の動向について報告があった。CWDは他のプリオン病と異なり特徴的な神経症状を示さないが、唾液や糞尿にもプリオンが排出され、土壤汚染を通じて拡散する。北米ロッキー山脈に限局すると思われていたCWDが韓国では済州島まで拡大しているとのことで、防疫上ホットな話題であった。

日本歯科医史学会からは絶滅した巨大なサメ、メガドロン（いわゆる天狗の爪石）の正体についての江戸時代の本草学者の考察が示された。サメ化石（由来はノアの方舟の大洪水に求める）とする当

時の欧州の百科事典等の影響を受けつつ、現生サメとの比較等でサメと推定するプロセスが示された。

日本看護歴史学会からは第二次大戦中の九州大学生体解剖事件について米国公文書館で調査し、当時の関係者の手紙を発見したとの報告がなされた。捕虜の米兵に希釈海水を注射し、死亡後に解剖したとの内容であり、生体解剖ではない旨とのことであったが、治療上、希釈海水の使用の必然性がなく、生体実験にあたりと感じた。九州大学内でのタブーに挑戦したことは称賛に値するが、当事者で「汚名」を



執筆した東野医師（東野産婦人科に展示室、書籍販売サイトがある）との連携などはないようで、今後の発展が望まれる。

洋学史学会からは解体新書の扉絵から、底本の調査を行い、秋田県の千秋美術館の藩医旧蔵の書籍にたどり着き、図表についても印刷不良箇所から実際にトレースされたと推定するまでのプロセスが示さ

れた。

日本医史学会からは、江戸時代までの人体構造の解明手段について示され、古来より九相図など死体への関心はあったこと、中国式の検視書の導入、洋書に基づくオランダ商館医師による豚、猪の解剖、刑死者や野ざらしの観察など、山脇東洋の腑分け以前にも実践的な活動があったことが紹介された。

六史学会講演報告

「緒方洪庵の薬箱研究を可能にした大阪大学所蔵ケシ標本の意義」

日本薬史学会評議員 高橋京子（大阪大学共創本部／総合学術博物館／大学院薬学研究科）

罂粟殻はケシ (*Papaver somniferum* L.) の成熟した果実または阿片採集のため乳汁を取り去った果実を乾燥したものと定義され、現在、あへん法の対象品のため、研究には麻薬研究者免許が必要です。しかし、大阪大学所蔵の適塾創設者・緒方洪庵（：洪庵 1810-63年）使用の薬箱や二反長音蔵（：二反長 1875-1950年、大阪府の篤農家）作のケシ育種研究資料、国内外の製薬企業や研究所製の生薬標本類は、近現代を通じ共通使用される罂粟及び阿片関連医薬品研究を可能にします。私は、2018年12月15日、順天堂大学医学部講堂で開催された六史学会合同12月例会において、日本薬史学会から指名を受け、「緒方洪庵の薬箱研究を可能にした大阪大学所蔵ケシ標本の意義」を演題としました。そして、二反長作ケシ標本の史的深化と形態学的調査／解析成果を基盤にして、洪庵の薬箱に現存する「罂粟」の基原をマテリアルサイエンスの視点から解析できることを報告しました。

二反長は各国より最良品種を蒐集し品種改良を進め、モルヒネ含量23%以上の三島種や福井種の育種、更に最大量の阿片汁が採取できる一貫種の創出に成功しました。本学標本は1930年5月28日に採取された二反長栽培の植物乾燥標本で、添付ラベルに栽培者／栽培地／採取日／品種／花の色／液汁の色の記載があり、トルコ種、アムール種、福井種、ムラサキ種、三島種、八重観賞用の地上部、一貫種の計12検体です。蒴果から採取した種子は、ほぼ腎臓

形をした黄白色～濃褐色で、表面に網目模様を有する *P. somniferum* の特徴的外部形態を呈し、種子長と網目模様の数から一貫種が三島種により近い系統であることが確認できました。

一方、薬箱の「罂粟」薬袋には、不揃いに粗砕された植物由来の小片6.9gが存在します。外表面の性状は褐色～赤褐色、平滑無毛で、内側は黄白色～淡褐色を呈し、時に黒褐色の小さな点を有します。洪庵由来の罂粟を証拠標本（津村研究所製和漢薬標本「罂粟殻」）と比較観察した結果、外壁の肥厚や花床部及び柱头条状の断片が確認でき、本品はケシ *P. somniferum* の果実 罂粟殻であると結論付けました。さらに発見された種子と二反長作ケシ標本類の特性から外国産ケシ品種に近い系統であると推察しました。

以上、生薬標本類は、生薬学的基原が明確な標品



であり、実地医療で品質が担保された証拠となる実体物です。その維持管理や次世代への継承に対し賛否両論ありますが、過去に正倉院薬物研究にも活用

されるなど、医療文化財研究において欠くことができない資料なのです。

〔寄稿〕

大韓薬学会薬学史分科学会の創立と活動

沈昌求（ソウル大学薬大名誉教授、元食品医薬品安全庁長、現在大韓薬学会薬学史分科学会長）
孫一善（東京大学大学院薬学系研究科 特別研究員）

韓国で薬学の歴史に関する学術大会が開かれるようになったのはつい最近のことである。1972年に洪文和教授を筆頭とする14人が韓国薬史学研究会を創立したと伝えられているが、その詳細な活動については現在記録に残っていない。2012年ようやく薬学の歴史に関心が高まるようになったのは、韓国薬学大学教育協議会（以下、薬教協）の依頼で「韓国薬学史」を編纂したことがきっかけであった。

2014年4月17日大韓薬学会春季学術大会で、大韓薬学会薬学史分科学会（Division of Pharmacy History, The Pharmaceutical Society of Korea）が創立された。翌日の創立記念シンポジウムでは「韓国薬学の歴史」というテーマで、「薬学教育制度史及び薬学史分科学会の歩むべき道」（沈昌求）、「薬事制度変遷史」（朱承宰）、「韓国薬業100年の歴史」（李鍾云）、「韓国GMP発展史」（白宇玟）、「韓独医薬博物館史」（李京録）、「日本薬史学会紹介」（津谷喜一郎）、「中国薬学史分科学会紹介」（Jinda Hao）の発表があった。2014年10月23日、第2回シンポジウムでは「最初の韓国人薬大学長都逢涉」、「薬学大学入門資格試験の過去と現在」、「液体クロマトグラフィーと検出器の国内普及36年」、「117年製薬報国同和薬品」が発表された。2015年4月23日、第3回シンポジウムでは「韓国薬学教育6年制度の歴史」、「ソウル大学病院薬剤部の歴史」、「韓国新薬開発研究組合の歴史」、「朝鮮薬学校と3・1運動」などが発表された。同年6月12日には、近代薬学教育機関設立100周年記念で分科学会とソウル大の共同開催で、「近代薬学教育史Ⅰ—朝鮮薬学講習所から京城薬学専門学校まで」、「近代薬学教育史Ⅱ—私立ソウル大学薬大から国立ソウル大薬大ま

で」、「日本近代薬学教育史」、「天然物科学研究所の歴史」、「近代薬学教育の発展」など、同年10月2日、第4回シンポジウムでは「韓国近代薬学教育100年の歴史」、「中央大薬大62年史」、「嶺南大薬大略史」、「現代薬学の父緑巖韓龜東博士の生涯と業績」、「薬剤師会100年の足跡」などが発表された。同年11月21日の日本薬史学会（奈良）では「韓国近代薬学教育100年の歴史」と「History of Ginseng Research」が、2016年4月18日、第5回シンポジウムでは「朝鮮大薬学大学の歴史」、「近代伝統新薬李明来膏薬の歴史」、「新薬開発と薬学大学研究費の歴史」、「薬務行政組織の変遷史」が発表された。同年6月9日ソウル大と共同でシンポジウムを開催し、「韓国薬学の父、緑巖韓龜東」冊子の発行にも参画した。2017年9月30日薬教協の報告書を編纂・修正し「韓国薬学史」を発刊した。2017年10月19日、第7回シンポジウムで「徳成女大薬大の歴史」、「忠北大薬大の歴史」、「成均館大薬大生の4・19革命参加」、「芸術なかの薬学」が、2018年4月20日第8回シンポジウムでは「北韓の薬学教育と薬事制度」、「薬人李乙浩」、「韓国薬学史関連文献紹介」が発表された。

薬学史分科学会の研究テーマは薬学大学や薬学教育が多く、国際交流では日本との交流が多い。大韓薬学会誌掲載の薬学史論文は、「韓国薬事制度の編成」、「わが国GMP変遷史」、「薬学史分科学会の創立とビジョン」、「韓国近代伝統医薬品である「李明来膏薬」の歴史」がある。大韓薬学会の一部である大韓薬学会薬学史分科学会は、毎年研究会やシンポジウムを開催し、ニュースレターとproceedingsを発行している。今年中に「薬学史会誌」を発刊する予定である。

中部支部報告

中部支部長 河村典久

中部支部例会と講演会を開催しました。詳細については後日改めて報告します。

例会・講演会

日 時：平成31(2019)年2月16日(土) 14:00～16:30

場 所：金城学院大学栄サテライト Tel 052-955-8668

〒460-0003 名古屋市中区錦三丁目15番15号 CTV錦ビル4階

セントラルパーク地下街10A出口前

演題① 本邦北限と南限の薬師如来像

名城大・薬 奥田 潤

演題② 東山植物園・伊藤圭介記念室『錦窠翁日記』について

圭介文書研究会 河村典久

「海外の薬史学会のいま(2) イタリア」

国際委員会 孫一善

イタリア薬局歴史学院(AISF; Accademia Italiana Di Storia Della Farmacia)は、2018年から電子ジャーナルの「Atti e memorie (行為とメモリー)」を導入することにした。

2017年に、the Nobile Collegio Chimico Farmaceutico of Romeは、Teriaca parchmentの原本、Dei Padri Benefattoriの両遺物が完全に修復され、本来所蔵されていた場所であるミランダにあるSan LorenzoのCollegioの身廊(しんろう)に返された。両遺物は、1600年代初期のものであり、Collegioの歴史的に非常に大事な史料である。2016年に、本遺物は、文化遺産省(the Ministry of Cultural Heritage)のアーカイブと図書館の遺産の回復と保全のために、the Central Instituteによる学術的研究と、完全なる修復を行うことになった。

Collegioでは、8セッションにわたる最先端な専

門知識を教えるコースが開かれた。このプログラムは生涯医学教育プログラムで、その一つは「進化する社会での薬剤師：過去の経験から未来の専門技術と経済的シナリオへ」のタイトルであった。80人の専門薬剤師らが参加した。

国際会議「医学からみたヒューマニティの未来：約束を書きかえる(Rewriting the contract)」では、Eric ChivianとMario Capecchiの二人のノーベル賞受賞者を含め、世界中からの科学界の専門家(脳科学者、気候学者、薬理学者、哲学学者、生物学者など)が参加した。

Noble College学長GianCarlo Signore執筆の「Alchimia」が刊行された。数世紀に亘る錬金術の歴史と本分野の主導者たちについて書かれている。

〔Book紹介〕

三瀬勝利 山内一也 著
「ガンより怖い薬剤耐性菌」
新書版 238頁 840円(集英社)

本書は、2018年6月刊行された(写真)。
その裏帯には、「大腸や皮膚にはたくさんの微生物が棲みついて、免疫をつけたり、食べ物を消化して栄養を与えたり、外部から侵入した病原微生物を抑えるなど、我々に多くの恩恵を与えてくれています。

ところが、抗菌薬の乱用によって、これら微生物が殺されて難病が急増しているばかりか、『薬剤耐性菌』の蔓延で薬が効かなくなっているのです」と記されている。

第1章「感染症の治療薬と薬剤耐性」では、「抗菌薬開発の歴史」、「薬剤耐性菌の出現」、「抗ウイルス薬の開発と耐性ウイルスの出現」の項で、三瀬、山内両博士のご専門性を充分発揮された記述である。

第2章「抗菌薬の乱用がもたらした2つの災害(耐

性菌の蔓延、新しい病気の急増)」では、喘息アレルギーや自閉症の患者の増加、肥満、炎症性腸疾患等の興味深い現象を分かりやすく解説している。

第3章「感染症を引き起こす病原微生物とその対策」、第4章「ガンや循環器病の原因となる微生物」も興味深い内容である。

本書は、引用文献も豊富で、用語解説(222～235ページ)もあり、医療分野の学生・大学院生にも有用な解説書と思われる。

(森本 和滋)



新村 拓 著
「売薬と受診の社会史 —健康の自己管理社会を生きる—」
329頁 2,800円(法政大学出版会 2018年9月出版)

本書の帯をみると、「セルフメディケーションの歴史的展開」と大きく示され、売薬購入と受診という行為を切口に上層農民の日記を通して跡づけつつ売薬医者と薬店、医師と薬剤師の競合・確執の具体相に迫る、と記載されている。著者は、早稲田大学大学院文学研究科博士課程出身の文学博士で、京都府立医大教授を経て北里大学名誉教授。医療社会史関連の書籍を多種執筆されている。

本書は、第I部 近世の薬屋・医者・病家(4章)、第II部 近世の日記にみる医療行動(2章14項目)、第III部 幕末・明治期の日記にみる医療行動(2章9項目)、第IV部 近現代医療の展開と売薬(2章7項目)から成っている。

本書は、江戸時代に麻疹やコレラなどに罹った病人に対する売薬を含む薬による治療法や予防法につ

いて丹念に記述している。とりわけ、現存する各地の日記を通して当時の医療の実態を解説。例えば第二部での相模国三浦の庄屋の家人が江戸末期から明治にかけて書き継いだ日記から、神仏に祈祷するのではなく病人に対する当時の医者の治療法や村人たちの風習などを多岐に渡り述べている。また、第四部は明治時代での売薬の扱い方、薬剤師と医師の医薬分業への熾烈な考え方や薬務行政の変遷などが解りやすく記してあり、医療史や売薬史に関心のある方々には恰好の参考書であると思われる。

(小清水敏昌)



薬史往来 薬史学会入会と星一関連発表

日本薬史学会監事 三澤美和

私が日本薬史学会に入会したのは昭和末年の1988年であったので、31年経過した。1981年に米国留学(カンサス大学)から帰ると、勤務先の星薬科大学では学史編纂の動きがあった。薬理学教室の前任教授であった当時大学理事の柳浦才三先生が理事会でこの話を進めていた。同大学は長い歴史を持つが、本格的な学史はなかった。私が柳浦先生を補佐する形で編纂に従事した。毎日、大学での教育・研究を中断し、夕刻から夜にかけてこの仕事に携わった。創業者星一および大学の歴史を余すところなく伝えるべく、史料の収集と目次の作成からはじまった。当時まだパソコン時代が緒に着いたばかりで、容量が少なく、語句の辞書保存だけをとってみてもわけなく頭打ちになった。プリンターの速度も亀の歩みのようであった。印刷物や保存フロッピーはうず高く部屋の一角を占めた。足かけ十年後の平成3(1991)年5月に1,400ページに及ぶ枕のような書を刊行し、創立記念日に客人にお渡しした。学史編纂の過程で、星薬科

大学は、星製薬商業学校、星薬学専門学校より以前に、星薬業講習会、さらにそれ以前に星製薬株式会社教育部が先行しており、星一は明治44(1911)年に製薬会社である星製薬を創立した年に、「人をつくる」として若い社員に薬学・薬業教育を行い、修了証書を与えていたことが判明した。星一は昭和25(1950)年の大学昇格を見て翌年亡くなったが、星一の中では人づくりの思想と実践は一貫性をもって連綿としていた。星薬科大学の創立年は星薬専設立時か星製薬商業学校設立時か学内では見解が二分して争っていた状況であったが、多くの裏付け史料で創立年を一挙に遡り、理事会および文部省にも承認された。制作した学史は、「星薬科大学八十年史」の名で、同大学の歴史を伝える何よりの宝となった。

この学史編纂の途次、稀有な人物星一と大学の歴史を世に伝えるため、薬史学会に入会し、以後同関連での発表は他学会でのそれを含めて35報に達した。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：小清水 敏昌

編集委員：荒木 二夫 久保 鈴子 齋藤 充生

薬史レター 第81号 2019年3月

編集人：小清水 敏昌 発行人：折原 裕

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 e-mail: yaku-shi@capj.or.jp http://yakushi.umin.jp
